

楽譜を見てすぐ歌う力「視唱力」についての意識

—幼児教育科の学生を対象とした調査より—

吉田直子

(京都教育大学大学院修了)

Recognition about Singing Immediately from Musical Notation

—A Survey for Kindergarten Trainees—

Naoko YOSHIDA

2009年11月30日受理

抄録: 本論文は本学幼児教育科学生を対象におこなった調査の結果にもとづき、「視唱力」について、過去の経験との関連や、現状と意識をあきらかにするものである。調査の結果「視唱力」は、今後教員として音楽指導に当たる上で必要性を強く認識されており、指導上の自信にもつながっていた。さらに幼少時からのピアノ等稽古事経験と、「視唱力」に対する意識とのゆるやかな関連性もあきらかになった。「視唱力」の指導には、学生の持っているこれらの意識を十分ふまえることが求められる。

キーワード: 視唱力 読譜 音楽指導 教師 ピアノ等稽古事経験

I. 本研究の目的

最近、アニメのテーマ曲やTVのCMソングなどメディアを通じて身の回りに多くの音楽があふれている。そのため、子ども達も音楽的に多様でリズムも複雑な“ノリの良い”歌を好む傾向が有る。子ども達と接する幼稚園や小学校教員を志望する学生は、子ども達の好みに合う新しい歌を次々と積極的に吸収することが求められる。最近ではさまざまな音源を通して、音楽を聞いて覚えることも可能になってきているが、簡単な歌の楽譜を見てすぐ歌うことができれば音楽指導上大いに役立つであろう。

しかし、実際には音大生を除く多くの一般の学生にとって、楽譜を見てすぐ歌うことはかなり難しいことだと認識されているようである〔吉田2007:2〕。かなり長期間、ピアノ稽古事などの経験があっても必ずしも楽譜を見てすぐ歌うことが容易ではないことも明らかになっている〔田中2002:45〕。義務教育の小、中学校の音楽科では、学習指導要領に読譜指導¹の指針と目標が示されているが、指導現場ではかなりのばらつきがみられているのが現状である〔杉江2007:21〕。

こうした現状に対して学生自身は視唱力に対してどのような意識を持っているのかを調査するために、筆者は2007年7月と2008年1月、京都教育大学小学校教員養成課程学生を対象に2回にわたりアンケートを実施した〔吉田2007:2-5〕。その結果、多くの学生が視唱力は子どもを音楽指導するうえで必要であり、便利でもある等の理由で身につけることを望んでいること、その一方で、視唱を難しいと感じていること、その原因として「リズムと音高（音程）を楽譜から把握することが難しいこと」を挙げていた。

心理学者の波多野誼余夫は、学習への動機づけについて「実践のために必要な知識を…自分の必要性のために学ぶという学習内容とその目標が明確になっているときには、私たちは自分の力で学ぼうという意欲が強くなる」と述べている〔波多野1996:223〕。つまり、視唱力に対する学生自身の必要性の認識や課題の困難性の要因についての意識は読譜学習に重要な影響をもたらすと考えられる。さらに学習者自身の視唱力に対する意識について把握することは、指導者が適切な指導を考える上で重要である。

そこで幼児教育科の学生を対象として視唱力についての意識、すなわち必要性の認識や何に困難を感じているか等について調査をおこなった。さらに、過去の経験と現在の視唱に対する意識との関連を調査するために、ピアノ等稽古事経験²が現在の視唱に対する意識にあたえている影響について分析と考察をおこなった。

Ⅱ. 研究方法

第1節の課題意識にもとづき、学生を対象に視唱に関する質問調査を実施した。さらに、現在までのピアノ等稽古事経験の有無と期間、レッスン開始年齢について尋ね、個別に視唱テストも実施して、各調査をそれぞれ質問調査結果と照合して関連性について検討した。質問調査の概要は次のとおりである。

(1) 調査時期

2009年7月

(2) 調査対象

京都教育大学幼児教育科学生2回生19名、3回生19名の計38名

(3) 調査方法

「器楽」など個別形態で実施される授業の待ち時間に質問紙による調査を依頼した。(授業終了時に回収)

(4) 回収率

97% (2回生1名欠席のため)

(5) 調査対象者の属性

対象学生は大学入学後、大学で授業として次のような音楽教育を受講している。

①「音楽基礎」

1年後期に受講する授業である。内容はおもにソルフェージュで、子どもの歌を音名で歌うこと、簡単な旋律を歌いながら並行してリズムを打つこと、3～4拍分の旋律の音名唱を模倣して歌い返すこと、Ⅰ、Ⅴ、Ⅳの3種類の和音を中心に子どもの歌の旋律に対する伴奏付け、童話にふさわしい簡単な歌の創作などである。

②「器楽Ⅰ」

1年後期に受講する授業である。内容は、バイエル、ブルグミュラー、ソナチネ、併用曲など個人の進度に応じたピアノの個人レッスンである。

③「器楽Ⅱ」

2年前期から後期まで受講する授業である。「器楽Ⅰ」での実習を引き継ぎ、エレクトーンやピアノなどの楽器を使用したコード付けや弾き歌いなどの実習である。後期には、より実践的な内容をおこなう。《ちょうちん》などの簡単な旋律を、スキップやジャンプ、ワルツなどの特徴的な身体的動きにふさわしいようにヴァリエーションしたり、それに合わせて身体を動かすこと、与えられた簡単な伴奏に適切な旋律を即興すること、与えられたイメージに適切な効果音や音楽を創作したり、その逆に与えられた効果音や音楽にふさわしいイメージを考えることなどである。

今回の調査対象者の2回生は「音楽基礎」、「器楽Ⅰ」を終了して「器楽Ⅱ」を学習中、3回生は「音楽基礎」、「器楽Ⅰ」、「器楽Ⅱ」の学習を終えている状況である。

Ⅲ. 調査結果と分析

質問紙調査の結果をふまえて、次の5つの視点について分析と考察を行なった。以下それぞれについて、2007年に実施した小学校教員養成課程学生を対象としたアンケート調査の結果とも比較しながら詳しく述べる。

1. 楽譜を見てすぐ歌うことが困難である原因は何か

最初に、楽譜を見てすぐ歌うことは難しいと感じるかどうかについて尋ねた。2回生、3回生合わせて計37名のうち、楽譜を見てすぐ歌うことが難しいと感じる学生は30人で全体のおよそ81%であった。さらに、難しいと感じると答えた学生にその原因は何かについて、①「声がうまく出ない」②「開始音をピアノでもらった音の高さから歌い始められない」③「楽譜を見ても、リズムがわからない」④「楽譜を見ても音程(音の高さ)がわからない」⑤「何がわからないのかよくわからない」⑥「その他」の6つの選択肢から該当するものをいくつ

でも自由に選択させた。

回答結果でもっとも多かった項目は④の「楽譜を見ても音程（音の高さ）がわからない」で全体の 32%を占め、次いで③の「楽譜を見ても、リズムがわからない」が 25%、①の「声がうまく出ない」が 23%の順であった。（表 1 参照）

この結果は、2007 年に同じ京都教育大学の小学校教員養成課程学生を対象に行ったアンケート調査と比較すると、「楽譜を見ても、『音高・音程』、『リズム』の 2 つがわからないこと」を視唱が難しい要因の第一に挙げている点で一致している。（表 2 参照）

つまり、小学校教員養成課程学生と幼児教育科学生を対象にした両調査ともに、楽譜を見ても音程・音高やリズムが把握できないことが視唱が難しいことの第 1 の原因であると学生は自己認識していることが明らかになった。

表 1 楽譜を見てすぐ歌うことが難しい原因（幼児教育科学生 37 名対象、2009 年 7 月調査）

	①声がうまく出ない	②開始音をピアノでもらった音の高さから歌い始められない	③楽譜を見ても、リズムがわからない	④楽譜を見ても音程（音の高さ）がわからない	⑤何がわからないのかわからない	⑥その他	全回答数
回答者数	15 (23%)	9 (14%)	16 (25%)	21 (32%)	2 (3%)	2 (3%)	65

単位（人）（重複回答を含む）（ ）内は全回答数に対する比率

表 2 視唱について難しいと感じる点（小学校教員養成課程学生対象、回答者 19 名、2007 年 7 月調査）

	回答者数
①発声	6 (17%)
②開始音	4 (11%)
③移動ド読み ³	8 (23%)
④リズム	8 (23%)
⑤音高・音程	8 (23%)
⑥その他	1 (3%)
計	35

単位（人）（重複回答を含む）（ ）内は全回答数に対する比率

2. 楽譜を見てすぐ歌うことができる能力についての必要性に対する認識

「簡単な楽譜を見ただけで歌うことができるようになりたいと思いますか」という質問に対しては、2、3 回生合わせて全回答数 37 人中 29 人（78%）の学生が「はい」と答えている。特に 2 回生では「いいえ」が 2 人、「特に考えたことはない」が 5 人に対し、3 回生は 3 回生回答数 19 人中 18 人（95%）が「はい」と答え、「いいえ」は 0、「特に考えたことはない」が 1 人だけである。（表 3 参照）自由記入欄に書かれた理由も 2 回生は（楽譜が読めると）「楽しそう」という答えが 5 人で最多であったのに対し、3 回生は「役に立つから」「試験や、現場で必要だから」といった答えが多かった。2 回生よりも 3 回生はより現実的に、視唱力を今後、子ども達の保育現場で必要な能力であると認識していることが明らかになった。2 回生では、「楽しそう」という回答の他に「かっこいい、便利である」「必要な能力である」「なんとなくうれしい」「役に立つ」などの意見が各 1 人ずつあった。（表 4 参照）

表3 簡単な楽譜を見ただけで歌うことができるようになりたいと思いますか

	はい	いいえ	特に考えたことはな い	全回答数
2回生	11	2	5	18
3回生	18	0	1	19
回答者数	29	2	6	37

単位(人) (幼児教育科学生対象、2009年7月調査)

表4 簡単な楽譜を見ただけで歌うことができるようになりたい理由

	便利だから	楽しそうだから	必要だから	嬉しいから	役に立つ	理由無記入	全回答 数
2回生	1	5	1	1	1	2	11
3回生	2	2	5	0	6	3	18
回答者数	3	7	6	1	7	5	29

単位(人) (幼児教育科学生対象、2009年7月調査)

2007年にも小学校教員養成課程学生を対象に同様の調査を行っている。小学校教員養成課程の回答者47人のうち72%にあたる34人が楽譜を見ただけで歌えるようになりたいと考えており、幼児教育科学生を対象とした調査と同様に視唱力を身につけたい意識は高かった。(表5、6参照)

表5 楽譜を見ただけで歌えるようになりたいですか

はい	いいえ	特に考えたことはない	全回答数
34	1	12	47

単位(人) (小学校教員養成課程学生対象、2007年7月調査)

表6 読譜できるとなぜいいと思いますか

※便利だから	※必要だから	※楽しいから	全回答数
5	9	4	18

単位(人) (小学校教員養成課程学生対象、2007年7月調査)

※回答は自由に記述を求めたが、この3種類に集約された。

つまり幼児教育科、小学校教員養成課程の学生ともに、視唱力を保育や学校の現場で必要で役に立つ能力であるとほぼ過半数が認識しており、さらに読譜できると便利、楽しそう、嬉しいと考えていることが明らかになった。

3. 階名として移動ド読み、固定ド読みのどちらが歌いやすいか

具体的に楽譜を読む際に用いる階名については多くの論議を経て、「移動ド読み」を用いることが現在の学習指導要領では定められている。しかし、この点について滋賀大学の杉江は調査報告書のなかで『移動ドでの読譜指導は難しいので、固定ドでもかまわない(項目10)』に関して、小学校・中学校教師ともに約84%が『そう思う』あるいは『ややそう思う』と回答している」と述べており[杉江2007:21]、義務教育の学校現場での指導は徹底されていないようである。

そこで、①「固定ド読み」や「移動ド読み」という言葉の意味がわからない②「移動ド読み」は「固定ド読み」に比べてかなり抵抗がある③「移動ド読み」は「固定ド読み」に比べて少し抵抗がある④「移動ド読み」は「固

定ド読み」より歌いやすいの4つの選択肢から「移動ド読み」についてあてはまるものを選ぶように指示した。

調査の結果、①の『固定ド読み』や『移動ド読み』という言葉の意味がわからない』を選択した答えが最も多く、回答数の32%を占めた。さらに、『移動ド読み』は『固定ド読み』に比べてかなり抵抗がある』という②を選択した答えが30%、『移動ド読み』は『固定ド読み』に比べて少し抵抗がある』という③を選択した答えが27%を占めた。④の『移動ド読み』は『固定ド読み』より歌いやすい』と答えたのは3名で8%であった(表7参照)。2007年7月に実施した小学校教員養成課程の学生を対象にした調査でも、19人中8人(42%)の学生が「移動ド読み」が難しいと答えている(表2参照)。このことから「移動ド読み」については「固定ド読み」に比べて歌いやすいと感じている学生よりも難しいと感じている学生のほうが多い現状であることが判明した。

表7 「移動ド読み」と「固定ド読み」に対する意識

※①	※②	※③	※④	無回答	全回答数
12 (32%)	11 (30%)	10 (27%)	3 (8%)	1 (3%)	37

単位(人) ()内は全回答数に対する比率

※各番号はそれぞれ次の選択肢を意味している。

- ①「固定ド読み」や「移動ド読み」という言葉の意味がわからない
- ②「移動ド読み」は「固定ド読み」に比べてかなり抵抗がある
- ③「移動ド読み」は「固定ド読み」に比べて少し抵抗がある
- ④「移動ド読み」は「固定ド読み」より歌いやすい

4. 視唱力と音楽愛好との関連性

視唱力の有無と日常の積極的な音楽活動との関連性について調査するために、15種類のさまざまな音楽活動について該当するものを選択するように指示した。さらに読譜力については、楽譜を見て歌うことを難しいと感じるかどうかにあつての自己認識によりグループ分けをして、グループ別に選択される項目に相違が現れるかどうかを検討した。表8は、楽譜を見て歌うことが難しいと感じる人と、特に難しいと感じない人の選択項目を一覧表にまとめたものである。

表8で、楽譜を見て歌うことが難しいと感じるかどうかに関係なく共通してまったく選択されなかったのは、⑨「歌を歌うのはどちらかといえばあまり好きではない」と⑮「とくに好きな音楽活動はないし、音楽とは日常生活であまり接点がない」の2項目である。また、楽譜を見て歌うことが難しいと感じるかどうかに関係なく選択率が高かったのは①「学校の音楽の授業は好きなほうだった」④「ピアノ他楽器を弾くのは好きである」⑦「カラオケで好きな歌を歌うのは好きなほうである」⑬「お気に入りの曲がある(ジャンルにこだわらず)」である。このことから、読譜力の有無にかかわらず音楽とは日常的に何らかの接点があり、歌を歌うのも楽器を弾くのもお気に入りの曲を聴くのも好きであることがわかる。

逆に、楽譜を見て歌うことが難しいと感じるかどうかで選択に4%以上違いがあつた項目を挙げると③「好きなメロディを作曲したり、好きな曲をアレンジしたりして楽しむことがある(楽しむことがあつた)」⑧「友達、家族など親しいグループで歌を歌うのは好きである」⑩「好きなアーティストのコンサートに行くのは好きである」の3項目である。また楽譜を見て歌うことが難しいと特に感じない人のグループでは②「学校の音楽の授業はあまり好きではなかった。(楽しくなかった)」⑥「特に楽器を自分で弾くことに興味がない」⑪「コンサートに行きたいとはあまり思わない」⑭「普段あまり視聴覚メディアを通じて音楽を聴くことはない」の4項目がまったく選択されていないのに対して、楽譜を見て歌うことが難しいと感じる人のグループではわずかにばかり選択されている。

つまり、これらの結果から、楽譜を見て歌うことが難しいと感じるかどうかは音楽活動に対する積極性、音楽活動に対する親近感に多少の影響を与えている可能性が考えられる。しかし、音楽愛好の度合いに大きく差が出

るというわけではなく、日常生活の中で自然に音楽に親しんでいる学生が多いことが明らかになった。

表8 日常的な音楽経験について 単位(人) ()内は読譜力別全回答数に対する比率
(最も多い数値に網掛けしている)

読譜力 選択項目※	楽譜を見て歌うことが 難しいと特に感じない人	楽譜を見て歌うことが 難しいと感じる人
①	7 (15%)	26 (15%)
②	0	3 (2%)
③	4 (8%)	7 (4%)
④	7 (15%)	21 (12%)
⑤	6 (13%)	17 (10%)
⑥	0	1 (1%)
⑦	7 (15%)	24 (14%)
⑧	6 (13%)	15 (9%)
⑨	0	0
⑩	1 (2%)	14 (8%)
⑪	0	5 (3%)
⑫	3 (6%)	15 (9%)
⑬	6 (13%)	20 (12%)
⑭	0	2 (1%)
⑮	0	0
全回答数	47	170

※項目の内容は次のとおりである。

- ① 学校の音楽の授業は好きなほうだった。(楽しかった)
- ② 学校の音楽の授業はあまり好きではなかった。(楽しくなかった)
- ③ 好きなメロディを作曲したり、好きな曲をアレンジしたりして楽しむことがある。(楽しむことがあった)
- ④ ピアノ他楽器を弾くのは好きである。(好きだった)
- ⑤ グループで楽器のアンサンブルをしたりするのは好きである。(好きだった)
- ⑥ 特に楽器を自分で弾くことに興味がない。(好きではなかった)
- ⑦ カラオケで好きな歌を歌うのは好きである。
- ⑧ 友達、家族など親しいグループで歌を歌うのは好きである。
- ⑨ 歌を歌うのはどちらかといえばあまり好きではない。
- ⑩ 好きなアーティストのコンサートに行くのは好きである。
- ⑪ コンサートに行きたいとはあまり思わない。
- ⑫ 視聴覚メディアを通じてよく音楽を聴いている。
- ⑬ お気に入りの曲がある。(ジャンルにこだわらず)
- ⑭ 普段あまり視聴覚メディアを通じて音楽を聴くことはない。
- ⑮ とくに好きな音楽活動はないし、音楽とは日常生活であまり接点がない。

5. 視唱力と音楽指導に対する自信との関連性

幼稚園教師は子どもの教育に直接かかわる職業であることから、幼児に音楽指導するうえで音楽的力量に関して不安に思うことについて尋ねた。不安に思うことがある場合は、特に①「歌」②「読譜」③「楽器」④「その

他」の4つの選択肢を設け、該当するものを答えるよう指示した。楽譜を見て歌うことが難しいと感じるかどうかとの関連性に注目して調査結果を表9にまとめた。

表9 音楽的力量について音楽指導上不安に思うこと

読譜力 不安の有無と内容		楽譜を見て歌うことが特 に難しいと感じない人	楽譜を見て歌うこと が難しいと感じる人	回答数計	
不安は特にない		5	1	6	
不安がある		2	29	31	
不安を感じる 具体的な内容 (重複可)	①歌	0	16	計	16
	②読譜	1	17		18
	③楽器	2	14		16
	④その他	0	0		0

単位 (人)

表9からわかるように、楽譜を見て歌うことが難しいと感じる学生30人のうち29人、97%が音楽的力量について音楽指導上不安に思うことがあると答えている。一方で、楽譜を見て歌うことが特に難しいと感じない学生7人のうち5人が特に音楽的力量について音楽指導上不安に思うことはないと答えている。

したがって、「楽譜を見て歌うことを難しく感じるかどうか」すなわち視唱力の有無は、幼児教育科の学生が今後子ども達に音楽の指導をしていく上で音楽的力量について抱く不安と、強い関連性を持つことがわかる。さらに不安を感じる項目として挙げられたのは、多い方から読譜、歌、楽器の順であり、学生自身にも視唱力の不足が自覚されていることが明らかになった。

6. 視唱に対する意識とピアノ等稽古事経験との関連

今回の調査では、楽譜を見て歌うことを特に難しいと感じない学生は7名だけであり、残り30名は楽譜を見て歌うことを難しいと感じると回答した。そこで、楽譜を見て歌うことを特に難しいと感じない学生と楽譜を見て歌うことを難しいと感じる学生の過去のピアノ等稽古事経験を調査して、視唱に対する意識との関連について検討した。

(1) 楽譜を見て歌うことが特に難しいと感じない学生の場合

楽譜を見て歌うことが特に難しいと感じない学生7名のピアノ等稽古事経験は表10のとおりである。

表10 楽譜を見て歌うことが特に難しいと感じない学生7名のピアノ等稽古事経験

被験者	ピアノ等稽古事経験の期間(年)	ピアノ等稽古事経験の開始時期
ア	10	5歳
ス	10	幼稚園
サ	10	幼稚園
チ	経験なし	
ケ	10	幼稚園
ハ	9	幼稚園年長
ミ	8	4歳

被験者“チ”以外は全員が幼児期より8～10年の期間稽古事経験を持っている。表10の7人のうち5人(被験者“ア”、“ス”、“サ”、“ケ”、“ハ”)は楽譜を見て歌うことが特に難しいと感じないという自覚どおり、実際におこなった視唱調査でも楽譜を見てほぼ正しく歌うことができていた。しかし、残りの2人(被験者“チ”、“ミ”)

は楽譜を見て歌うことが特に難しいと感じないと自覚しているにもかかわらず、実際には正しく視唱できていなかった。つまり難しいと感じないことと、自覚どおり正しく視唱できることとは必ずしも直接結びつかないことがわかる。

しかし、表10をみてわかるように幼児期から10年程度のかなり長い期間ピアノ等稽古事続けた経験がある人に楽譜を見て歌うことを特に難しいと感じない人が多い傾向はある。

(2) 楽譜を見て歌うことが難しい学生の場合

次に楽譜を見て歌うことが難しいと感じる学生のピアノ等稽古事経験について調査した。このグループでは、ピアノ等稽古事経験はまったく無い学生からかなり長い期間経験のある学生まで分布していたが、5～10年、または10年以上という長期間の稽古事経験が有る学生が20人で、全体の約67%であった(表11参照)。

表11 楽譜を見て歌うことが難しいと感じる学生30名のピアノ等稽古事経験

	経験なし	0～5年	5～10年	10年以上	計
計	3	7	10	10	30

単位(人)

楽譜を見て歌うことが特に難しいと感じない学生の場合と同様に、楽譜を見て歌うことが難しいと感じる学生のなかにも、幼児期から10年程度のかなり長い期間ピアノ等稽古事続けた経験がある人が多かったことから(表11参照)ピアノ等稽古事経験が長ければ楽譜を見て歌うことが容易であるとはいえない。

しかしこのグループについても、実際におこなった視唱調査では正しく視唱できている学生も含まれており、あくまで「楽譜を見て歌うことが難しいと感じる」という自分の意識にもとづいた調査であるため、実際の視唱についても分析をおこなう必要がある。

そこで次に楽譜を見て歌うことが難しいと感じる学生のうち、6年以上の比較的長期のピアノ等稽古事経験がある学生の実際の視唱力に注目して調査の結果分析をおこなった。

(3) 6年以上の比較的長期のピアノ等稽古事経験があるが正しく視唱できなかった学生の場合

次の表12は幼小期よりピアノ等稽古事経験が6年以上あるが、楽譜を見て歌うことが難しいと感じ、実際に視唱課題を正しく視唱できなかった学生である。

表12 ピアノ等稽古事経験が6年以上あるが正しく視唱できなかった学生 単位(人)

被験者	ピアノ等稽古事経験の期間(年)	ピアノ等稽古事経験の開始時期
ウ	6	小1
キ	6	小1
シ	8	小1
ツ	6	小1
ナ	11	小1
ノ	10	小2
ホ	6	小1
メ	10	4歳
ユ	7	年長
ヨ	7	4歳

表 12 の学生は 6 年以上という比較的長いピアノ等稽古事経験があるにもかかわらず、楽譜を見て歌うことが難しいと感じており、実際の視唱もかなり不正確であった。中には 10 年以上のピアノ等稽古事経験があるにもかかわらず正しく視唱できなかった学生もみられた（被験者“ナ”、“ノ”、“メ”）。したがって長い期間ピアノ稽古事を続けた経験によって視唱を容易に感じたり、視唱力を必ず身につけたりすることができるとはいえない。しかし一方で表 10 のように、幼少時からある程度長期間の継続的なピアノ等稽古事経験が視唱力の獲得につながっているケースもある。つまり、10 年程度の長期間のピアノ等稽古事経験は視唱力となんらかの因果関係があると考えられるが、具体的な要因については今後の課題である。

IV. 結論と今後の課題

第Ⅲ章において、幼児教育科学生を対象におこなった質問調査をもとに読譜力に対する学生の意識を詳しく分析した。視唱は多くの学生が難しいと感じているが、一方で身につけたい能力であると考えられていることがわかった。特に子どもに直接音楽を指導する幼児教育科の学生には、将来、保育現場で必要な能力であると十分認識されていた。さらに視唱力の有無は音楽指導上の自信に非常にかかわりが深いことがあきらかになった。

楽譜を見てすぐ歌うことが特に難しいと感じない学生は、幼少時から 10 年程度長期間のピアノ等稽古事経験があることが多かった。この調査結果から、比較的幼少時からある程度長期間のピアノ等稽古事経験により身につくことが多い何らかの能力が、視唱力と深い関係を持っていると考えられる。一方で、比較的幼少時から長期間のピアノ等稽古事経験を持っても楽譜を見てすぐ歌うことを難しいと感じ、実際に正しく歌えない学生も多いことがあきらかになった。幼少からの長期間のピアノ等稽古事経験によりどのような能力が身につくのか、またどのように視唱力に影響を及ぼすのかについてあきらかにすることは、読譜を習得させるための積極的な指導法を考える上で重要である。

近年子ども達の音楽を聴取する力の向上とは逆に、楽譜を見て把握する視唱力（読譜力）は低下しているといわれている [杉江 2007 : 3]。最近では音楽科で邦楽をはじめ、さまざまなジャンルの音楽を扱うようになり、読譜指導についても西洋音楽の記譜法である五線の楽譜一辺倒に対する疑問の声や、音楽活動において読譜が必ずしも不可欠なものではないことから音楽科で読譜を教える意味について再確認する必要性があるとの指摘もある [杉江 2009 : 13-15]。今回調査をおこなってあらためて感じたことは、多くの学生が視唱力を便利なものと感じ、身につけたいと願っていること、特に幼児教育科や小学校教員養成課程など子どもに音楽を直接指導する立場にたつ可能性が高い学生は必要性を切実に感じていることである。しかし、現実には視唱力を持っており自らの音楽的基礎能力に不安を感じていない学生は、比較的幼児期から長期間ピアノ等稽古事経験を持つことができた学生のうちの一部でしかなかった。

長期間ピアノ等稽古事経験があっても視唱力に相違がみられる原因についての解明は今後の課題である。さらに、比較的幼児期から長期間のピアノ等稽古事経験が有る学生の一部が身につけることができた能力が意図的に身につけたものであるかどうかについては今後検証する必要があるだろう。その上で、視唱が苦手な学生の「音とリズムが楽譜から把握できない」という自己認識をふまえ、効果的な視唱指導法を考えていきたいと考えている。

【注】

¹ 本論文では視唱力は読譜力とほぼ同じ意味で用いている。

² 本論文ではピアノのほかに電子オルガンの稽古事経験も含めているため「ピアノ等稽古事経験」と記述している。

³ 移動ド読み、固定ド読みともに「唱法、すなわち音階の諸音や楽器奏法の一動作にそれぞれシラブル（音節）を対応させ、音程やリズムをつけて歌う音楽の習得方法」[小川 2004 : 474]の種類である。「西洋音楽において、ある 1 つの音にはその音の絶対的位置を示す＜音名＞とその音が属している調の相対的位置を示す＜階名＞の 2 種類がつけられている。音名によって歌う唱法を＜音名唱＞といい、＜固定ド＞唱法がこれに対応する。階名によって歌う唱法を＜階名唱＞とよび、＜移動ド＞唱法がこれに対応する」[小川 2004 : 474]。

【引用・参考文献】

小川昌文（2004）「唱法」『日本音楽教育事典』音楽之友社、pp.474-479

田中喬子（2002）「幼稚園教員養成における音楽基礎能力の育成—視唱力について—」『関西楽理研究』第19巻、pp.41-50

杉江淑子（2007）「教科『音楽』の授業内容と学力に関する調査」『平成18年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究B（18330190）「音楽科における教育内容の縮減と学力低下の様相」〈研究代表 小川容子〉教師調査班調査報告書』、p.21

——（2009）「子どもや若者の『聴く力』と読譜の役割」『音楽教育実践ジャーナル』通巻13号、pp.6-15

波多野誼余夫（1996）『認知心理学5 学習と発達』東京大学出版会

吉田直子（2007）「教員養成系大学学生を対象とした『視唱』能力向上のための指導法—『モデル・パターン方式』の提案—」京都教育大学大学院修士論文、pp.2-5